



## 幼児の声域に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 伊藤, 勝志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00002356">https://doi.org/10.32150/00002356</a>

## 幼児の声域に関する研究

伊 藤 勝 志

### 目 次

はじめに
幼児の生活と歌唱
幼児の歌唱と声域
幼 児 の 声 域
幼児の声域に関する調査
目的・方法・結果と考察
幼児の声域と歌唱経験
今後の課題
要約
註・文献

### はじめに

歌唱はあらゆる音楽の出発点であると言われている。このことは、音楽の起源に関する考察の中においても、発生の過程に関してはいくつかの異論はあるにしても<sup>(1)</sup>、ことばのもつリズムカルな面とメロディックな面が言語機能から独立して生じた歌が、音楽の最初であるとの説が今日最も有力であること<sup>(2)</sup>や、幼児の音楽体験に関する観察から、例えば生後8ヶ月ごろ、「単純なメロディーにのった発声をする<sup>(3)</sup>」と言われることにその芽を見出し得るように、リズム的運動に次いで、人間の最初のまとまった音楽的体験は、「フレーズの断片がしだいに長くなった形での<sup>(4)</sup>」歌であり、これはやがて、記憶の発達や身体諸器官の充実に伴ない正確さが増すと、メロディーを他の楽器で再現すると言うような<sup>(5)</sup>、さらに発展した形の音楽活動へと移行すると言われている。

このように、音楽の出発点として歌唱を位置づけることは、歴史的、発達の側面からいくつかの論拠は得られるが、実際的な面からの言及もなされているようである。つまり、歌唱は、音楽を通して子供の人格形成を考える際の主要な活動形態なのでもある。このことは、“唱歌”を中心として始められ、その後いくつかの反省に基く改革がなされたと言われる今日においてもなお、歌唱が教室音楽の主流を成している我が国音楽教育の現状や、諸外国においても、音楽学習の中心的活動が歌唱である<sup>(6)</sup>と言われていることなどからも明らかと思われる。うたうことを充分体験することによって獲得される様々な音楽的能力は、例えば器楽演奏に際しても「うたう」ことが言われ、或いは作曲、鑑賞などの活動にも、「内的な音楽」としての「うたう」ことが重要な役割を果たしていると言われるように、その後の音楽活動のあらゆる面に活用されるものと思われる。歌唱はこういう意味から「音楽演奏の基礎であり、より深い音楽的理解を育てる準備<sup>(7)</sup>」と考えられ、又それ故に「音楽教育の中心的柱<sup>(8)</sup>」であるとも言われ得るものと思われる。

このように、音楽の基礎と言われる歌唱は、外形のみに目を向けると、聴覚記憶に基く、発声器官

を通しての音声による模倣再現又は創造的表現<sup>(9)</sup>であり、生理的な運動に外ならない。とは言え、この運動に関与する聴覚、記憶、呼吸器系とこれらを支える筋肉群<sup>(10)</sup>、及びこれらの全体を統制する中枢神経系などは、全て発達の原理に従い、活用することによってその発達が促進される<sup>(9)</sup>ものである。

音楽活動における歌唱の基礎的、中心的性格は「音楽以前の音楽<sup>(5)</sup>」活動と呼ばれる幼児期の極めて不正確と言われる歌唱においても、何ら変わるものではない。心理的にも生理的にも未成熟な幼児にとって、歌唱は単なる喜びの表現、楽しい経験のみに留まるべきものではなく、感覚と記憶を頼りにせざるを得ない幼児期であるが故に、音を聞き、歌をおぼえ、そしてうたうという一連の活動を通し、感覚的、知的、生理的、およそ歌唱に必要な機能を十分に訓練し得る最良の機会なのでもある<sup>(11)</sup>。こうした訓練によって得られた諸機能の充実は、後の音楽的諸能力の根元となり、例えば、共に声を合わせてうたい合うと言う如き、社会的にも、より高次な喜びの体験<sup>(12)</sup>が可能となって行くものと思われる。このような意味からすれば、聴覚的発達の最も著しいと言われる3～6歳の子どもを「教育」する場においてこそ、「音楽の基礎」としての歌唱は細心の注意を払って体系的な指導が計画されるべきものと思う。今日、指導者に対してはピアノ技術のみを特に求めるような幼児教育の場において、上記のような計画を実行し、実践するうえで予想される困難はあまりにも多いとは言え、人間存在の本質と関わりを持つと思われる音楽を、教育の一手段として取り上げ得る限り、それらの困難は一つずつ克服される必要があろう。そのためには、これまであまりなされていなかった幼児の歌唱の実態を、あらゆる角度から検討して行くことが急務となろう。本小論に於いては、その一部分について、概観した後、幼児の歌唱能力を規定すると思われる声域について簡単な考察を加えたい。

### 幼児の生活と歌唱

うたは幼児の日常生活に深く根を張っている活動の一つであると思われる。清水は579名の幼稚園児の母親について、家庭で歌をうたっているかどうかの回答を質問紙によって得ているが、これによると「歌わない」と答えた者が僅か8名(1.4%)に過ぎなかった<sup>(13)</sup>。これとほぼ同様な結果は、函館市内の幼稚園児272名についての調査からも得られている<sup>(14)</sup>。子どもの家庭生活における歌唱の実態を、質問紙のみで完全に把握することの困難さは言うまでもないと思われるが、概略的な様子を知ることは可能なものと思われる。

一方、幼児の日常生活を観察した梅本と新名は、遊びの中に頻繁に歌唱があらわれ、これは1才台から、メロディーをもった発声遊びとして始まっていることを報告している<sup>(15)</sup>。4歳と2歳の姉弟を1月間観察した筆者の調査では、二人で合計426回の歌唱が記録された<sup>(16)</sup>。

子どもがうたうことには、刺激の量も含めた様々の環境によって左右されることが大きいものと思われるので、個々の数値を並べることはそれ程意味のあることと限らないが、すでに前段においても触れたように、歌唱はことばを獲得する過程であられるものであり、それが又、クルプスカヤの言う如く、未発達なことばを補うところの、一つの表現手段<sup>(17)</sup>でもあると考え得るならば、聴覚及び発声の諸機能が正常である限り、「歌うと言うことを経験しない幼児は一人も居ない<sup>(18)</sup>」ことになるものと思われる。

### 幼児の歌唱と声域

さて、幼児のうたは、ことばだけでなく「簡単なメロディーさえも6～7歳まで音程正しくうたうことは出来るものではない<sup>(19)</sup>」とまで言われることもあるように、所謂「調子外れ」の歌い方し

か出来ないものと考えられている場合が多い。身体的にも未熟な幼児期は、声帯も極めて弱く、同時に、発声に際して用いられる諸筋肉や呼吸のコントロールが充分には行われ得ないこと。その結果、声域も狭少ならざるを得ないことなどを考慮するならば、これはむしろ当然のことかも知れない。しかし、幼児が音程正しく歌えないとの考え方に否定的な報告も多い。畑は3～4歳児計56名を対象に、歌唱の正確さを音程の面から調査しているが、正確な音程でうたった子どもは3歳児25名中2名(約8%)、4歳児31名中6名(19.4%)と報告し、正確にうたえる子どもの比率が、年令と共に増加するのは、身体発育に伴う声帯の強化、機能の充実によるものであろうと述べている<sup>(18)</sup>。清水も又、幼稚園児453名に「チューリップ」をうたわせて、歌唱能力の評価を行っているが、これに依ると、音程正しくうたえた子どもは138名(約30%)あったと報告している<sup>(20)</sup>。何れの場合も正確さの基準については十分な説明がなされていない故、詳細な検討は出来ないけれど、4～5歳児でもある程度正確な音程でうたえることを示唆するものであろう。

年令と共に正確にうたえるようになるのは、歌唱能力が、「うたう体験の反復<sup>(19)</sup>」による、声帯も含めた機能の充実と、それに伴う「声域の拡大、記憶力、言語力の発達<sup>(15)</sup>」などとも関連するものであるが故であろうと思われる。特に梅本は、メロディー感の発達を環境との関連から説明し、「テレビとの接触度、子どものまわりに居る人の影響、子どもの生活条件、などが歌のレパートリーにあらわれ、」それが音程の正確さにも影響を及ぼしているというようなことを述べている。レパートリーの多いことは、それだけ多くの歌をうたう経験が多いということであり、そのことは、正確にうたうと言うことと結びついていくように思われる。

さて、歌を正確にうたうことの最大の条件は、詞を別にすればリズムと音程を正確にと言うことであろう。しかし Bentley, A の指摘や畑の報告などからも知られるように、リズムは歌唱の場合比較的正確に把握され易い<sup>(21)</sup>故、あまり問題視されない。しかし音程については、特に声帯等の十分に発達していない幼児にあっては、その狭少と言われる子どもの声域によって大きく影響されてしまう。勿論、歌唱に於ける音程の不正確さは、単に声域の問題だけでなく、歌唱に関与するところの聴覚、神経、呼吸や筋肉のコントロールなどの生理的な側面及び、歌唱時の心理的側面など多種多様であると言われるが、仮りに、既製の旋律をうたう場合、その曲が要求する音高が、子どもの発声可能な範囲を超えてしまっているとするならば、歌唱は音程の不正確なものにならざるを得ないのである。このようなことから、幼児の歌唱にみられる不正確な音程について言及する限り、声の出し得る範囲に関する十分な認識が、今まで以上になされなければならないのは言うまでもない。これは又、子どもの特性に合った歌唱教材を選択するうえでの大きな手がかりの一つでもあることは、ともすれば子どもを無視した、一方的な歌を押しつけてしまう危険性のある幼児教育の場において、再三指摘されてきた<sup>(22)</sup>ところなのである。

### 幼 児 の 声 域

一般に声域は音楽用語として「声の出る高低の範囲<sup>(23)</sup>」或いは「声の出る最低音と最高音の間<sup>(24)</sup>」などと説明されているが、例えば「漠然と声の出る範囲とか、最大限に出し得る範囲」とかではなく、「音楽的に無理のない声を出し得る範囲<sup>(25)</sup>」と言う如き、感覚的、実用的な定義もある。しかし「音楽的に無理のない」声についての検討は十分に成し得ないので、ここでは楽語としての定義に忠実に従いたい。

それでは、幼児の「声の出る最低音と最高音の間」はどれ位であろうか。梅本は、ピアノの白鍵のみを用いて音を出し、実験者に続いて同じ音を子どもに発声させる方法で子どもの声域を調べた、Jersild 等の研究を紹介している<sup>(26)</sup>が、これによると2、3、4歳では正しく出せる音域はそれぞ

れ4度、6度、9度であった。そして、声域の年齢に伴う拡大は5～6歳にかけて特に著しく、性別による差が明確になり、しかも、何れの年齢も個人差の大きいことを見出したと言う。

幼児の声域が年齢と共に拡大し、5歳台から性差があらわれることは、最近の調査においても同様に観察される場所である。清水は、ピアノ音を呈示した後上行5度の音階を歌わせることで、4～6歳までの幼児151名について調べているが、これによると、幼児の声域は2半音（長2度）から24半音（2オクターヴ）にまで広く分布し、年齢的には、12半音以下が4歳児で83%、6歳児で60%、13半音以上になると、4歳児が17%、6歳児では40%と、年齢が進むにつれ、声域の拡大が顕著にみられている<sup>(27)</sup>。藤原も又、3～5歳児の声域を表示しているが、これによると10度以上の声が出るのは5歳以後で、男女合わせて18%、一方4度以下は4歳児54%に対し5歳児では23%と、約1/2に減少している。又、性差については4歳児でそれ程大きくないのに対し、5歳児ではかなり明確にあらわれている<sup>(28)</sup>。

一般に幼児の声域は5～8度<sup>(23)</sup>であると言われ、子どものうたえる音域も二又はハからハまでの7～8度であるとされている<sup>(25)</sup>が、上記の報告において、声域に相当の個人差があると思われることや、年齢、性別等によってもかなり異なった様相を呈していることを考慮するならば、これまで一般的に認められていた声域に関する考え方は、かなり現在の子どもの実情とずれが生じているようにも思われる。

年齢による声域の拡大は、先にすでに触れたように、身体発育及び歌唱経験の繰り返しによって、声帯をはじめとする諸機能の充実が促進されるためであろうと思われるが、男女差については必ずしも十分な検討がなし得ない。しかし、あそびに関する研究等を通してみると、「うたをうたう」或いは「うたを伴う遊び」が女児に多いことから、やはり経験量の差異に起因するところが大きいのではなかろうか<sup>(29)</sup>。勿論、全く自然的な発育に伴うものを度外視する訳には行かないけれど、発育が完了した成人においてすら、訓練することにより声域の拡大が相当認められることを考えるならば、幼児期においてはうたう経験が多いか少ないかが子どもの声域とある程度の関連があるのではないかと、との予測は可能であろう。これまでの研究例では、子どもの声域を経験の量的側面に関連させて実証的に考察されたものが見られないことから、以下にこの点を明らかにしていきたい。

## 幼児の声域に関する調査

### 1. 調査の目的

本調査の目的は次の二点を、子どもの声を通して確かめることである。

- a. 幼児の声域に関して概略的な理解
- b. 幼児の声域が、彼等の歌唱経験の多少によって左右されるのではないかと、との予測を、横断的、縦断的に検証すること。

### 2. 調査の方法

調査対象は本学附属函館幼稚園園児4、5歳児延べ133名、その内訳は表-1に示される通り。調査は昭和50年7月と、一年後の昭和51年7月の二度にわたって実施された。声域の調査は個別に行われ、おおよそ次のような手順である。先ずピアノにより1オクターヴの音階を呈示し、これを階名でうたうように求めた。この場合、上限の決定には上行音階を、下限の決定には下行音階をそれぞれ使い分け、何れの場合も半音ずつ移調しながら呈示した。階名唱が充分出来ないとと思われるSには、「チューリップ」の後半四小節を、

表-1 対象児の構成

	男	女	計
4歳児	35	33	68
5歳児	32	33	65
計	67	66	133

伴奏つきで歌うように求めた。Sの声はテープレコーダーに集録し、これをもとに、後日二名の判定者にて各Sの声域を決定した。決定に際して利用されたものは判定者の耳とピアノだけであるので、正確を期する意味から、各Sの出し得た音程より上限、下限とも半音ずつ減じたものを資料として整理した。なお、一般には声域の表示を「度」でなすのが普通のものであるが、長、短、増、減などの繁雑さを除くため、ここでは主として半音単位で表わすこととする。歌唱の経験については、家庭の音楽的な環境に関する質問紙を用い、この中で各Sがどの程度歌をうたっているか、主として母親の判断を仰いだ。質問内容及び評定の尺度は次に示す通り。

1. 一人で(あそんで) いる時
2. テレビ, ラジオ, レコードの歌に合わせて
3. 家族のうたう歌に合わせて

の各々に用意された解答は、イ、いつもうたっている。ロ、たまにしか歌わない。ハ、全くうたうことはない。の三段階である。なお結果の整理に際しては、評定尺度のイ、ロ、ハ各々に2、1、0の得点を与え、三つの質問項目に対する総点を基礎資料とした。

### 3. 結果と考察

表-2及び表-3は、声域の下限及び上限を性別、年齢毎の人数比で表わしたものである。全体的にみると、幼児の声域は下はfからe'までの11半音内に、又上はc'-g<sup>2</sup>までの20半音内に、かなり広い範囲で分布していることが解るが、この中でも特に、下限はfからhまでの間、上限はa'からd<sup>2</sup>の間に大部分が含まれるようである。又、この表より、例えば5歳児では下限がより低い方に、上限はより高い方に分布が多くなっていることなどから、年齢或は性別による声域の違いも示唆されるので、さらに検討してみよう。

表-4は、対象児の声域を最狭から最広まで、三半音毎に分割し、各々に含まれる人数を百分比

表-2 声域下限の分布(%)

		f	fis~gis	a~h	c'~e'
四歳児	男児	0	42.9	17.1	17.1
	女児	0	42.4	57.6	0
	計	0	42.6	48.5	8.8
五歳児	男児	6.3	40.6	50.0	3.1
	女児	3.0	57.6	30.3	9.1
	計	4.7	49.2	39.9	6.1

表-4 声域の分布(%)

	4 歳 児		5 歳 児	
	男	女	男	女
4~6	14.3	0	9.4	0
7~9	11.4	3.0	12.5	3.0
10~12	20.0	21.2	15.6	12.1
13~15	22.9	42.4	25.0	12.1
16~18	20.0	21.2	21.8	36.4
19~21	8.6	9.1	6.3	18.2
22~24	2.8	3.0	9.4	18.2

表-3 声域上限 %

		c <sup>1</sup> ~d <sup>1</sup>	d <sup>1</sup> <sub>is</sub> ~f <sup>1</sup>	f <sup>1</sup> <sub>is</sub> ~g <sup>1</sup> <sub>is</sub>	a <sup>1</sup> ~h <sup>1</sup>	c <sup>2</sup> ~d <sup>2</sup>	d <sup>2</sup> <sub>is</sub> ~f <sup>2</sup>	f <sup>2</sup> <sub>is</sub> ~g <sup>2</sup> <sub>is</sub>
四歳児	男児	8.6	8.6	8.6	40.0	28.6	2.8	2.8
	女児	0	3.0	3.0	48.5	33.3	12.1	0
	計	4.4	5.9	5.9	44.1	30.9	7.3	1.5
五歳児	男児	3.1	12.5	18.7	21.9	31.3	12.5	0
	女児	0	3.0	3.0	24.2	33.3	21.2	15.2
	計	1.5	7.7	10.8	23.1	32.3	16.9	7.7

で表わしたものである。これによると、何れの年令も男子は狭い方に、女子は広い方、又、男女共4歳児は狭い方に、5歳児は広い方にそれぞれ比較的高い比率を示す傾向がみられるが、このような傾向については、顕著な差が何ら得られなかった。

表-5は、年令、男女毎の平均声域及びsを示したものである。先ず、男女間の差については、各年令とも女子の声域が広く、このような傾向は特に5歳児において一層明確にあらわれている。

表-5 声域平均 (単位 半音)

	4 歳 児			5 歳 児		
	男	女	計	男	女	計
平均	12.7	14.6	13.7	13.6	16.9	15.3
s	4.7	2.9	4.0	4.9	4.0	4.7

( $t=2.657$ ,  $p<.02$ ) 4歳児におい

ては個人差が特に男子に目立っている。(F=2.67, P<.05).

次に年令間では、全体的にみると5歳児の声域は4歳児のそれよりも広がっていることが解るが、このような傾向は男子の場合あまり明確にならなかったものの、女子においては特に顕著であった( $t=2.64$ ,  $p<.02$ ).

以上の点を総合すると、幼児の声域は上限下限の音や狭広の分布などにも、統計上は明確な結果としてあらわれないとは言え、それぞれに年令、性別により幾分の差違を生じる傾向があること。又4歳児にしてすでに平均1オクターブ以上の声域を有し、これは年令と共にさらに拡大していく傾向があり、このことは特に女兒に顕著であること。一方、性差はすでに4歳から、女子の声域が男子のそれよりも広いという現象として観察されるが、こうした傾向も、年令と共に更に強まるものであること、等々が言えるものと思われるし、これらは又、先に検討したこれまでの研究例ともほぼ一致するものでもある。

### 幼児の声域と歌唱経験

質問紙の回答に基く各Sの歌唱状況は表-6の通り、これに依ると、何れの年令においても女兒の方が家庭で歌をうたう割合が高いようであるが、顕著な差は見られなかった。そこで、得点5及び6のSを「経験の多い群(A)」得点2、3のSを「経験がやや少ない群(B)」の二群に分けたうえで、各群に属するSの声域を検討した。

表-6 家庭における歌唱経験(実数)

	4 4 歳 児 児		5 歳 児	
	男	女	男	女
2~3	17	10	12	10
4	10	5	13	6
5~6	8	18	7	17

表-7は、A、B両群の声域を、性別、年令に従って並べたものであるが、これに依ると何れの年令も、性別に関わりなくA群の方が高くなっており、こうした傾向は5歳児の方に一層顕著にあらわれている。

( $t$ 検定の結果、A、B両群間の差は4歳児では男女の何れも不明確、5歳児では何れも $p<.02$ )一方、男女共B群においては年令間での差異がほとんど見られないのに対し、A群では何れも顕著な差が認められている。このことは図-2において更に明確に示されるもの

表-7 歌唱経験と声域

	4 歳 児				5 歳 児			
	男		女		男		女	
	B	A	B	A	B	A	B	A
n	17	8	10	18	12	7	10	17
平均	12.5	13.9	14.5	14.9	12.3	19.0	14.7	18.8
s	4.2	6.7	3.1	2.8	4.6	3.4	4.5	2.6

と思う。

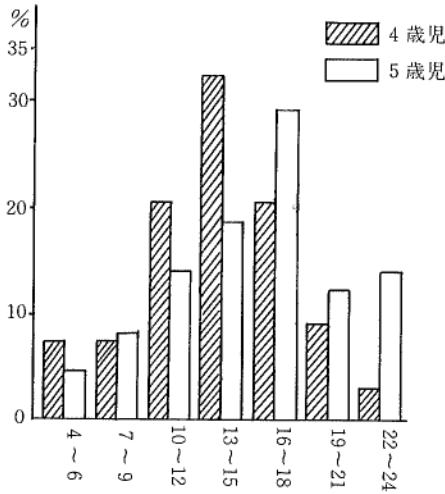


図-1 年齢毎の声域

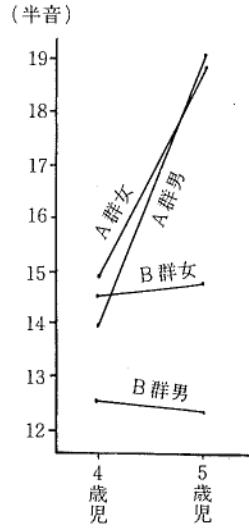


図-2 歌唱経験と声域変化

これによるとB群は男女共年齢に依る変化がほとんど見られないのに対し、A群では声域の拡大が顕著に認められる。つまり、家庭においていつも歌をうたっている子どもは年齢による声域の拡大が大きいのに比し、あまりうたわない子どもの声域は、それ程変化しないと言えそうである。この点を継続観察に基く資料によって、更に検討してみよう。

表-8は、一年の間隔において調査された同一対象児(男女32人)の声域を、変化量で示したものである。これによると、一年間で声域がまるで変化しない者から、8半音広がった者まであり、(減少は0)変化量も女子の方に僅かながら大きくなっている傾向が見受けられるが、性差は不明確である為、以下については両者をまとめて整理した。

表-9は、一年間の声域の変化量をA、B両群について分類したものであるが、この表からも解るように、変化量の大きい者はA群に多く、逆にあまり変化していない者はB群に多い( $\chi^2=5.23$ ,  $P<.05$ )。更に表-10に示される如く、両群間の平均変化量も又、明らかにA群の方が大きくなっている。以上の結果は、いつも歌をうたっている子どもは年齢による声域の拡大が顕著であるのに対し、あまりうたわない子どもの声域はそれ程変化しないと言う前述の結果をも、ある程度裏付け得るものであると思う。なお、歌唱の経験を量的に把握する方法については、今後更に検討しなければならない。

表-8 一年間の声域変化

	男児	女児
0~2	46.7	35.3
3~5	40.0	29.4
6~8	13.3	35.3
平均	2.5	4.1
s	3.3	2.3

表-9 歌唱経験と幸域変化

	A	B
三半音以下	5 33.3	8 80.0
五半音以上	10 66.7	2 20.0
	15	10

表-10 歌唱経験と声域変化

	B	A
n	12	15
平均	2.4	4.9
s	2.0	2.0

$f=3.06$   $P=.02$

## 今後の課題

これまで、幼児の歌唱能力を規定すると思われる声域について、実態把握の意味も含めて、いくつか検討し、ある程度の子供とされた結果を得ることが出来たように思われるが、いくつかの点で問題があるので、ここではそれらに触れることに依って今後の進め方について、いくつかの方向を示しておきたい。先ず一つは、声域の発達に関する生理的なメカニズムが、本稿では勿論のこと、他の諸研究に於いてもほとんど明確にされていない点である。声域が訓練に依って広がることはすでにいくつかの文献にも言及されてはいるし、本小論に於いても、これをある程度裏づけ得るような結果が得られたものと思うが、子どもの中には、良く歌っていても声域がそれ程広がっていない場合もあれば、又、その逆の場合も散見された。そうすると、声域が広がるために関与する他の条件が、何処かに存在しているものと考えられる。この点を明らかにするには、歌唱の、というよりも発声の生理的なメカニズムを先ず明確にしておくことが必要であろう。

次に、すでに少し触れたが、本稿に於いて利用された如き質問紙のみに依る経験量の把握では、到底子どもの様子を完全に知ることが出来ないし、その限りに於いて、全ての対象児を同じ条件として扱うことも出来ない。それ故、ここに揚げられた結果を盲信することなく、実験的な方法などにより、更に確認していかなければなるまい。このことは、例えば「声域の狭い子どもは社会性の面から未発達な場合が多い」とのいくつかの示唆に対して、そのような子どもをどう指導するか、という実践的な面とも密接な関係を持つことになるものと思われる。又、本稿において問題を提起しながら何ら考察を成し得なかった、幼児教育の場で用いている歌唱教材の音域と子どもの声域との関連や、そこから当然派生せずにはおれないと思われる、ことばのリズムや音程を基礎にしたわらべうたの問題など、幼児の歌唱活動をとり上げる限り、解決されるべき課題はあまりにも多い。機会あるごとにこれらの一つ一つを眺めていきたいと思う。

## 要 約

歌唱は音楽の根源であり、音楽教育の中心的活動でもある。このことは聴覚をはじめとする音楽的諸能力の発達が著しいとされている3～5歳の子どもを対象とする幼児教育の場において、特に重要な意味を有している。このような考えを前提に、子どもの歌唱の正確さと最も関係の深いと思われる声域について、過去の研究報告等を検討した後、実態把握を主とする調査を行った。その結果、幼児の声域は4歳児にしてすでに性差がみられ、これは5歳児になると更に大きくなることや、僅か一年の違いでも、年令と共に声域が広がることなど、これまでの報告とほぼ一致した結果が得られた。

又、声域と歌唱経験の量の関連については、方法上の不満があるとはいえ、かなりはっきりと確認することが出来た。これらの結果を基礎として、更に研究を進めるうえでの方向が2、3示唆された。

## 註および文献

1. 鈴木敏明  
音楽の教育  
幼年教育講座6, 黎明書房 44年
2. 山根銀二  
音楽の歴史  
岩波新書 32年

3. 村田孝次編  
幼児の表現生活  
朝倉保育基礎講座 4, p. 35 朝倉書店
4. Bently, A  
Musical Ability in Children and its Measurement.  
Georg G. Harrap 1966
5. 園部三郎  
幼児と音楽  
中公新書 49年
6. 小田野正之  
声楽発声指導法の研究(I), 歌唱教育の問題点を探る  
東京学芸大学紀要, 第5部門 24, 1972, p. 43-56
7. 畑 玲子  
幼児の歌唱能力に関する一考察(2)  
聖和女子大学論集 3号, 1973, 12, p. 73
8. 西沢昭男  
日本人のリズム感覚と音楽教育  
音楽教育研究 12, 1970, No. 56, p. 20-27 音楽文友社
9. 時実利彦  
脳と保育 雷鳥社 1971
10. 森山俊雄  
発声と共鳴の原理, 音楽文友社 51年
11. 長谷川苺  
幼児心理と音楽リズムの指導 p. 16  
田中教育研究所編, 幼児指導の心理講座 5  
音楽リズム, 明治図書 1976年
12. 鈴木敏朗  
音楽とその導き方  
講座, これからの保育内容 4, 明治図書 1973
13. 清水美代子  
幼児の家庭生活と音楽リズム  
幼児の教育 73-1 p. 48-60 1973, フレーベル館
14. S 49年2月, 学生の調査による  
園児 272名中「どのような歌をうたっているか」の項目について, 回答のなかった者が8名, 3%
15. 梅本堯夫, 新名和子  
メロディー感の発達研究——遊び場面における子どもの歌の分析—— 音楽教育研究, 1971年6月号 p.  
20-31
16. 伊藤勝志  
幼児の歌唱活動について  
日本保育学会, 第27回大会発表論文集
17. クルプスカヤ著, 園部四郎訳  
幼児教育について 新読書社 1969 p. 292
18. 畑 玲子  
前掲論文 p. 83
19. 園部三郎  
幼児期の情動活動とリズム  
音楽教育研究 1970, 10月号, p. 50
20. 清水美代子  
幼児と音楽  
市邸学園女子短期大学人文科学論集 8, 9合併号 1971, p. 129-152
21. 3~5歳児 410名中, リズムの誤りは8名(2%) 0, 音程のくるとは65%であった。畑, 前掲論文より

伊藤勝志：幼児の声域に関する研究

22. 藤田妙子  
音楽活動の指導の内容と方法  
藤田復生編・現代保育研究3、保育の内容 福村出版 1972、p. 147
23. 堀内敏三他編 音楽辞典 36年 音楽の友社
24. 梅本堯夫  
音楽心理学 誠信書房 45年 p. 465
25. 幼児音楽教育研究会編  
幼児音楽教育法 東京書籍 S 48 p. 12
26. 梅本堯夫 前掲書による
27. 清水美代子  
幼児と音楽——幼児の歌唱——  
市邨学園女子短期大学人文科学論集14号 1973 p. 69-95
28. 藤原高男  
幼稚園における音楽適期指導の研究  
音楽教育研究 No. 33 1969, 1月 p. 12-21
29. 柴田文子, 長谷川久子, 牧文彦, 山本道子  
幼児のあそびに関する研究  
姫路短期大学研究報告15, 45年1月 p. 101-136

(本学講師・函館分校)